フリースクール開設以前の奥地圭子の教育観
――『ひと』における「母親教師」としての記述に着目して――

田中　佑弥 *

奥地圭子は、日本の代表的なフリースクールである東京シューレを 1985 年に開設したことで知られている。本稿では、教育雑誌『ひと』（太郎次郎社）における記述に着目して、フリースクール開設以前の奥地圭子の教育観を考察した。登校拒否児の母親であり、小学校教師であること、つまり「母親教師」であることを通して、奥地の教育観は培われていった。

キーワード：母親教師、登校拒否、不登校、フリースクール、民間教育運動

はじめに

奥地圭子は、日本の代表的なフリースクールである東京シューレを 1985 年に開設したことで知られている。「フリースクール全国ネットワーク」や「登校拒否・不登校を考える全国ネットワーク」の代表理事のほか、文部科学省の「フリースクール等に関する検討会議」委員を務めるなど、長年にわたって精力的な活動を展開してきた。

先行研究において奥地は、フリースクールの運営者として少なからず参照されている（朝倉 1995, 樋田 1997, 樋田 2010, 佐川 2009 など）。しかし、奥地が 1985 年に東京シューレを開設する以前は、熱心な小学校教師であったことは、あまり注目されていない。フリースクールに関連して奥地への言及がなされるという経緯からして、フリースクール運営者として注目されることは当然ではあるが、奥地の活動をより深く捉えるためにはフリースクール開設以前についても検討されるべきである。一事例ではあるが、奥地が子どもの登校拒否 (1) などの困難に直面しながら、教育をどのように捉えていたかを考察することにより、日本におけるフリースクール成立過程の背景を明らかにしたい。

東京シューレ開設以前の奥地について言及している先行研究はいくつか存在する。荻野（2001）は、教育雑誌『ひと』と奥地の関わりを論じ、奥地の子どもの登校拒否が、彼女がフリースクールを開設する契機になったことを指摘している。また、田中（2015）も子どもの登校拒否を契機に奥地が登校拒否像を大きく変容させたことを指摘しており、田中（2016）は東京シューレ開設以前の奥地と、フリースクール研究会、米国のフリースクールとの交流等について述べている。

しかし、熱心な小学校教師であった奥地が、学校への批判的な視点を強めるまでに、母親として、そして教師として、どのような葛藤があったかは詳細に検討されていない。よって本稿では当時、奥地が頻繁に寄稿していた教育雑誌『ひと』における記述を精読することで、フリースクール開設以前の奥地の教育観を明らかにし、フリースクール開設に至る軌跡を深く捉えることにする。

* 武庫川女子大学

1　教育雑誌『ひと』

（1）『ひと』の概要

東京シューレ開設以前の奥地を考察するために、本稿では『ひと』を研究対象とする。『ひと』は、遠山啓、石田宇三郎、板倉聖宣、遠藤豊吉、白井春男を刊行発起人として 1973 年に創刊され、一時休刊しながらも 2000 年まで太郎次郎社から刊行された [(2)]。『ひと』の刊行期間を大別すると、6 つの時期に分けられる。

第 1 期は、創刊号である 1973 年 2 月号から、遠山が死去する 1979 年の 12 月号までである。表紙には編集代表として遠山の名が記載された。創刊号には刊行発起人による記事「まず、第一歩を」が掲載された。

第 2 期は、1980 年 1 月号から 1986 年 1 月号である。1980 年 1 月号には『ひと』編集委員会の「さらに新しい一歩を」という記事が掲載され、遠山亡き後も『ひと』を発展させていくことが宣言されている。第 2 期と第 3 期は表紙に「遠山啓●創刊」「編集●『ひと』編集委員会」と記載された。

第 3 期は 1986 年 2 月号から 1993 年 1・2 月合併号である。1986 年 2 月号に『ひと』編集委員会の「“まず、第一歩を„たしかめつつ、ふたたび“さらに新しい一歩を„」が掲載されていることから、同号を第 3 期の始まりと考えられる。

第 4 期は鳥山敏子が編集代表を務めた 1993 年 3 月号から 1994 年 12 月号である。

第 5 期は 1995 年 1 月号から 1998 年 3 月号である。佐藤学、里見実、竹内常一が編集代表委員を務めた。1998 年 3 月号で休刊し、『ひと』のリニューアルを図ることになった。再刊準備のための「読者との交信誌」として『ひとネットワーク』が 1998 年 4 月から 1999 年 3 月のあいだにほぼ隔月で 6 号発行された。

第 6 期は隔月誌として再刊された 1999 年 9・10 月号から 2000 年 7・8 月号である。『ひとネットワーク』は通号になっていないが、再刊された第6期は通号になっており、最終号は308号となっている。

（2）『ひと』を研究対象とする理由

1985 年の東京シューレ開設以前の期間と重なる『ひと』第 1 期（1973 年 2 月号～ 1979 年 12 月号）および第 2 期（1980 年 1 月号～ 1986 年 1 月号）に、奥地が著者または座談会参加者として関わっている記事を調査したところ 42 件が確認された [(3)]。

内容によって分類すると 42 件の記事は、以下の 5 つのタイプに分けることができる。それらは、①奥地の教師経験に関するもの（7 件）、②奥地の教育実践に関するもの（13 件）、③担任クラスの様子について書かれた「教室寸描」と題されたシリーズ（11 件）、④座談会（4 件）、⑤その他（7 件）である [(4)]。

CiNii（国立情報学研究所学術情報ナビゲータ）で検索すると、東京シューレが開設された 1985 年以後には『世界』（岩波書店）などに奥地の記事が掲載されているが、それ以前は教育科学研究会の分科会報告（奥地 1969）が 1 件あるのみである（2018 年 9 月末時点で『ひと』は CiNii に収録されていない）。

東京シューレ開設以前の奥地の論考が『ひと』において数多く発表されたこと、また奥地の初単著『女先生のシンフォニー：「いのち」を生み、育てる』（奥地 1982a）の初出も『ひと』であることから、『ひと』掲載の奥地の記事は、東京シューレ開設以前の奥地を考察するという目的に適う研究対象である。

次節以降、原則として時系列に沿って『ひと』掲載の奥地の記事や関連著作を見ていくことにより、フリースクール開設以前の奥地の教育観を考察する。

2　母親教師としての経験

（1）仕事と家庭の両立

1941 年生まれの奥地は、横浜国立大学を卒業し、1963 年から東京都の葛飾区立松南小学校で教師としてのキャリアを始めた。1972 年に広島市立江波小学校に勤務するが翌年に帰京し、1985 年 3 月の退職まで江戸川区立下鎌田西小学校に勤

表1 『ひと』（1973年～1985年）における奥地圭子執筆記事（単著）および参加座談会

号	頁	表題
8号（1973年 9月号）	55 - 67	おり紙の実践（上）――小学3年生のおりがみ先生
9号（1973年10月号）	74 - 85	おり紙の実践（下）――小学3年生のおりがみまつり
11号（1973年12月号）	16 - 29	座談会　母親として、教師として
14号（1974年 3月号）	83 - 95	一年間でなにをしたか
36号（1976年 1月号）	22 - 27	給食の時間――班対抗リレーとくだものの皮むき
42号（1976年 6月号）	12 - 23	母親教師って、いいわよ
76号（1979年 4月号）	64 - 75	訪中感想記（前編）――中日の教育交流をめざして
77号（1979年 5月号）	57 - 67	訪中感想記（後編）――中日の教育交流をめざして
81号（1979年 9月号）	42 - 60	子どもたちと〝原爆〟の創作劇をつくる――「さびたミシン」上演まで
83号（1979年11月号）	15 - 30	子どもを生かす評価を求めて――その改革のための足どり
83号（1979年11月号）	109	公開編集会議報
92号（1980年 8月号）	52 - 77	えんぴつができるまで――どれだけの人手が必要か
105号（1981年 9月号）	41 - 42	教室寸描　畳を教室に敷いてみたら
106号（1981年10月号）	とびらのことば	（無題）
106号（1981年10月号）	59 - 61	教室寸描　教室のなかのダンボールの家
107号（1981年11月号）	52 - 53	教室寸描　読みきかせからの発展
108号（1981年12月号）	16 - 28	子ども新聞活動――このおもしろきもの
109号（1982年 1月号）	56 - 57	教室寸描　なぞなぞくん
110号（1982年 2月号）	50 - 51	教室寸描　みごとな切り絵の世界
111号（1982年 3月号）	63 - 66	教室寸描　足もとに土があった
112号（1982年 4月号）	80 - 82	教室寸描　子どもがつくる学級通信
113号（1982年 5月号）	46 - 47	教室寸描　子どもが変わるとき
114号（1982年 6月号）	70 - 72	教室寸描　内言帳
114号（1982年 6月号）	103 - 106	私のすすめたい本　菅龍一『善財童子ものがたり』
115号（1982年 7月号）	14 - 30	川と人間――川のたび・小学校4年の実践
116号（1982年 8月号）	46 - 47	教室寸描　いのちを考える
117号（1982年 9月号）	49 - 50	教室寸描　食べ放題の街
118号（1982年10月号）	4 - 14	「いのち」育てとしての教育
122号（1983年 2月号）	28 - 42	〝いのち〟のとうとさを教える
123号（1983年 3月号）	32 - 43	座談会　子どもも育ち、親も育つ――幼児教育をめぐって
125号（1983年 5月号）	4 - 21	この教育状況のもとで、授業をつくるとは
126号（1983年 6月号）	10 - 31	自分はどこから生まれたの――ぼくとわたしの生命のはじまりは
129号（1983年 9月号）	13 - 25	座談会　なぜ学校に行かなくてはいけないの？――登校拒否体験を語る
130号（1983年10月号）	とびらのことば	（無題）
131号（1983年11月号）	とびらのことば	（無題）
132号（1983年12月号）	23 - 28	子どもを本好きにする作戦――教室のなかの子どもランド・子ども図書館
133号（1984年 1月号）	17 - 27	中学校・この現実に言いたいこと――小学校教師から
137号（1984年 5月号）	18 - 33	「おしっこといのち」の授業
140号（1984年 8月号）	2 - 17	座談会　明日の授業をつくる座標を求めて――戦後教育の流れを検討する
146号（1985年 2月号）	21 - 37	授業・かけがえのない、この〝いのち〟――生命の誕生・地球と人間
148号（1985年 4月号）	4 - 14	子どもが学校を棄てはじめた
152号（1985年 8月号）	71 - 77	いま、なぜ公立学校の教師をやめたか

務した。奥地は家族で定住するつもりで出身地の広島に移ったが、夫が仕事の都合で転居できなくなったため帰京することになった（奥地 1974）。家族はキャリア形成や日常生活において制約になり得るが、その影響はとりわけ女性にとって大きなものである。

『ひと』1973 年 12 月号の特集は「母親として、教師として」であるが、同名の座談会に奥地が参加している [(5)]。奥地は一人目の発言者として「いま私は、1 歳と 4 歳とふたり子どもがいるんですが、朝は出かけるまでが戦争」と多忙な日々を語っており、他の参加者も「母親教師」として仕事と家庭の両立の困難を語っている。

座談会前年の 1972 年には『毎日新聞』が「ますます増える女の先生」（1972 年 9 月 23 日、東京朝刊 2 面）と報じているように、女性教員の増加が注目されていた。小学校教員は、戦前は男性が圧倒的多数であったが、1938 年以降に徴兵のため男性が減少すると女性が増加し、1944 年には女性が半数を超えた（板倉 1973）。戦後になると男性が増加し 1950 年に半数を超えるが、1960 年から再び減少し始めた。一方、女性は 1962 年の約 16 万人から 1981 年の約 27 万人まで一貫して増加し続け、1969 年以降は女性が過半数となっている [(6)]。

母親教師としての経験については 1976 年 6 月号（特集：教師が忙しさを超えるとき）の記事「母親教師って、いいわよ」でも述べられている。奥地は「女であるうえに、家庭をもって、子どもも三人いるという三悪そろったはずれ教師」として疎まれ、乳児であった奥地の子どもの病気のために数日休むと「こんなに学級の子を放っておかれて、責任とってくださるんでしょうか」と保護者から校長に電話が入る状況であった（奥地 1976, p.12）。奥地は「母親であるうえに教師をやろうなんて、結局、できないことをやろうとしている欲ばりなのかなあ。こんな状態では、学校の子どもにも申しわけないから、ほんとうは教師をやめるほうが子どものためなのかなあ」（奥地 1976, p.13）と悩んだが、母親教師には母親として保護者と同じ視点に立てるという肯定的な面もあると思うようになった。出産の経験から「教育って、何かを教えこんだり、それをまた、おぼえたかテストしたりすることじゃなくて、命の力をのばすことだ」（奥地 1976, p.15）と考え、「女の先生や子持ちの先生に不満をもつのは、たいてい同性である母親」であったが、母親も教師もひとを育てていることに違いはないと述べている（奥地 1976, p.23）。

なお、「母親教師って、いいわよ」は『ひと』掲載時の著者名は奥山時子であるが、単著（奥地 1982a）に所収されていることから、奥山時子は奥地の別名であることが分かる。「奥山時子」名での記事は他に後述の 1983 年 5 月号の記事と 1983 年 10 月号の「とびらのことば」が掲載されており、いずれも奥地の勤務校の校長や保護者、奥地の子どもの担任等への批判的言及があることから、周りへの影響を考慮して本名での寄稿を避けたと推測される。

（2）家庭における困難

奥地は熱心に教育実践に取り組んだが、1981 年頃は自身の父親の難病、子どもの拒食症に直面した苦しい時期であった。

1982 年 10 月号（特集：女先生って、いいな）掲載の「「いのち」育てとしての教育」で奥地は、母親教師の困難を再び語っている。教師になって 20 年のあいだに、「子どもの長期の病気、転勤、三人目の出産、親の看病など、もう教師をやめたほうがよいか、と思ったときも何度かあった。家事・育児・看護は女の仕事とみる日本の社会のなかで、女性が自分の仕事をもって働きつづけることは、まだたいへんにしんどい生き方であった」（奥地 1982c, p.4）。父親が難病のため、東京の専門病院に入院した際には「「わざわざ、いなかから引きとったんですって。来年は 6 年生だっていうことを考えてくれてるのかしら」という声があると聞かされて、教育観もここまでやせてきたかと恐ろしい気がしたこともあった」（奥地 1982c, p.6）。奥地の『ひと』での記述（1982 年 4 月号、1983 年 2 月号）から、父親は 1981 年 9 月に入院し、

1982 年の夏に亡くなったと考えられる。

また、「「いのち」育てとしての教育」では触れられていないが、奥地の長男は転校後、1978 年から行きしぶりがあり、1981 年の 2 学期に拒食症、登校拒否になっている [(7)]。

（3）長男の登校拒否

長男の登校拒否は『ひと』においては 1983 年 9 月号（特集：学校を超えて生きる）まで明らかにされなかった。同号掲載の座談会「なぜ学校に行かなくてはいけないの？ —— 登校拒否体験を語る」は奥地を司会に 7 名の登校拒否経験者が参加しており、その内の 1 名は奥地の長男である [(8)]。

奥地もかつては「子どもは学校へ行くのがあたりまえで、どの子も行っている。それなのにうちの子は行けない。それは恥ずかしいことだ」と考えていた（奥地 1983a, pp.83-84）。1983 年までに多くの教育実践記録を『ひと』に寄稿しているが、自身の子どもの登校拒否や拒食症については触れていない。管見の限り、奥地が公刊物で初めて言及しているのは、初単著の「あとがきにかえて」である。「あとがきにかえて」の最後の小見出し「母親として、教師として」で奥地は、つぎのように述べている。

> わが子の登校拒否、それは私にとっても重要な体験となりました。……私は、うろたえ、そして深刻な悩みにつきおとされたのです。というのは、私のせいで、つまり、私が勤めをもっているため愛情不足になったとか、私の母親としての育て方が悪かったとかいう原因でこうなった、という説明が、それまでかかっていた医者からなされていたからなのです。……家のなかでも、エネルギーが涸れて、はって歩くような子どもを見て、私は、子どものために学校で闘ってきたつもりの自分が、わが子をこんなめにあわせるのでは、もう人の子の教師などできない、と思いました。（奥地 1982a, pp.322-323）

幸いにも長男は 1981 年 12 月に国立国府台病院で精神科医の渡辺位と出会い、快復していった。同病院内の登校拒否児の親の会である「希望会」に参加した奥地は、「いまの学校が、どれほどゆがんでおり、子どもをつぶす状況にあるか」を知り、「母親が自分のいのちから生みわけ、育てた子どものいのちが、それぞれの生命力を発揮することなく、萎え苦しんでいる状況がみえてきて、これまでうとんぜられた女の先生こそ、この能力主義と管理主義に侵された日本の学校教育をよみがえらせる力を内に秘めていると強く思うようになりました」と述べている（奥地 1982a, p.325）。長男の拒食症を契機に退職を考えた奥地であったが、この時点では母親教師として学校教育に取り組む意志が示されている。

長男は 1982 年 12 月、自身の登校拒否経験を小学校の卒業文集に書くことで「自分自身をとりもどせるようになった」。奥地は、卒業文集に加え、奥地自身が子どもの登校拒否を不特定多数の人がいる場で話せるようになったことも長男の変化の契機であったと振り返り、その理由を「親が登校拒否をした子どもを恥ずかしいと思っているあいだは、子どもが堂々とできるわけはありません」と述べている（奥地 1983a, p.114）。

（4）『ひと』における登校拒否への言及

『ひと』において長男の登校拒否は 1983 年 9 月号まで明らかにされなかったが、登校拒否に関する言及はそれ以前にも見られる。最も古いと思われるのは 1982 年 6 月号の「私のすすめたい本：菅龍一『善財童子ものがたり』」という書評である。菅は神奈川県の定時制高校教員（当時）で、『善財童子ものがたり』は『ひと』（1976 年 7 月号～1979 年 10 月号）に連載された児童文学である。学校に行かない童子（主人公）が旅を通して成長する「『善財童子ものがたり』は登校拒否の物語であるともいえる」として、奥地はつぎのように述べている。

> 学校にこだわり、学校の求める価値観に子ど

もをあわせようとやっきになっているいまの日本の教育状況のなかで、するどい学校教育への告発であるとともに、教育というものを根底から考えてみることを、私たちに童子は問うているのである。……望まない学校へ無理に行かされ、学校の強いる勉強や行動に明け暮れていたら、童子のようなかしこい豊かな人間は育たなかったのではないか。これからの子どもの教育は、人間をだめにする方向にやみくもに走っている学校にまかせず、自前のものさしをもって道を開いていくしかないことを、みずからの生き方を示すことで、童子が語りかけている気がしてならない。その意味で、童子は新しい人間像なのである。（奥地 1982b, pp.105-106）

長男をはじめとする登校拒否の子どもたちが、童子と重ね合わせられていると考えることが妥当であろう。書評での間接的表現ではあるが、奥地の新たな子ども理解の生成が示されている。

また、『ひと』1982 年 7 月号掲載の実践記録（川沿いを歩いて考える江戸川の学習）では、奥地が担任していた学校を休みがちな生徒について詳しく書かれている。学習内容と直接的な関係はないのだが、教育実践をこの生徒にとってどのようなものにしようとしたかについても書かれており、良い授業展開への関心だけでなく、学校を休みがちな子どもへの着目を読み取ることができる。

（5）「いのち」の授業

長男の拒食症や父親の難病を通して、奥地は「いのち」をより強く認識するようになったと考えられる。奥地は「いのち」の授業に取り組み、1982 年 8 月号以降、『ひと』には 5 つの実践記録が掲載されている。それらは、雑草の観察を通して「いのち」の多様性を考える学習（1982 年 8 月号）、食べものを導入として「いのち」のつながりを考える実践（1983 年 2 月号）、性教育（1983 年 6 月号）、尿をテーマに体と「いのち」を考える授業（1984 年 5 月号）、そして「授業・かけがえのない、この“いのち„」（1985 年 2 月号）である。

尿をテーマに体と「いのち」を考える授業では、奥地の父親が難病のため体の自由を失い、最後には排尿ができなくなって亡くなったことが話された [9]。

「いのち」への着目の背景には、性教育への関心の高まり（『ひと』1983 年 2 月号、6 月号は「性と生」を特集）や、「国連婦人の 10 年」（1976 ～ 1985 年）もあると考えられる。

3　学校への批判的視点

奥地は、「これまでうとんぜられた女の先生こそ、この能力主義と管理主義に侵された日本の学校教育をよみがえらせる力を内に秘めている」と述べていたように、長男の拒食症を契機に直ちにフリースクールの開設を考えていたわけではなく、小学校で「いのち」の授業に精力的に取り組んでいた。しかし一方で、奥地は「母親教師」として学校に対する批判的視点を強めるようになっていった。

（1）登校拒否に関する指導主事の発言

奥地が学校に対する批判的な視点を強めるようになった重要な契機の一つと考えられるのは、登校拒否に関する指導主事の発言である。奥地は以下のように振り返っている。

たいていの学校に日曜参観というのがあります。私がまだ教師だった数年前、私の勤務校でも、ある指導主事がその日曜参観に講師として来られ、授業のあと、参観の全父母と教師が体育館でその人の話を聞くということがありました。私の長男は、すでに登校拒否中でした。指導主事の話のなかで、自立心を育てないとどんな子になるかという例として、こんな話が紹介されました。

ある男の子は小学校五年までごく普通に登校していたが、六年生で登校拒否に入ってしまった。先生が何度迎えにいっても会いもしない。電話にも出られない。親しか受話器をとらない。

それだけではありません。寝るときお母さんのパジャマのすそをにぎって離さないのです。お母さんもいいなりになっているのです。一、二時間ベッドのそばに母親がついてやって、パジャマをにぎっていないと一人で眠れないのです。みなさん、六年生で、もうぼつぼつ毛もはえてこようというのにですよ。

そんな話を、さもおかしそうに動作をまじえて紹介すると、会場の親や教師たちはどっと笑いました。……私は、そのとき、体中がカアーッと熱くなるのが自分でもわかりました。なんてことを！ みんなが登校拒否について知らないのをいいことに、なんてことをいうの！ と怒りがたぎりました。私には、そのお母さんのつらさがありありとわかりました。だれがすきこのんで、六年生の子どもにパジャマのはしっこをにぎらせるのでしょう。……私は、このつらさ、悔しさを終生忘れまい、つらくて困っている弱い立場の人をもの笑いにして、いい気になっているそんな人間には決してなるまい、と固く思うことでその場の屈辱感に耐えました。（奥地 1989, pp.208-209）

自身の子どもの登校拒否を経験した母親教師として小学校で「いのち」の教育に取り組んでいた奥地にとって、指導主事のこのような発言は看過できないものであった。そして、教師の意に沿わないことで笑い者にされる子どもの側に立つことを通して、奥地は学校への批判的な視点を強めていったのである。

（2）「奥山時子」としての寄稿

1983 年 5 月号（特集：授業を楽しくする法）は、とりわけ注目すべき号である。「漢字あそび」「ソーラン節をやったら、鉄棒ができるようになった」などが掲載されているなか、「奥山時子」名での奥地の寄稿「この教育状況のもとで、授業をつくるとは」が異彩を放っている。奥地は、自身の子どもたちが通う学校の教師の体罰などに言及し、「熱心なことはおそろしいことでもあるのだ。私は、この自戒を教師をやっているかぎり、忘れてはならないと思っている」（奥地 1983b, p.15）と述べている。

授業については以下のように述べ、戦後民間教育運動も批判的に捉える視点を示している。

かつて、それに参加することが誇りであった民間教育運動の遺産に固執して、この教材なら、この方法なら、とおなじものをもちだしても、まえのようにうまくいくとはかぎらない。授業は生きものである。これをやればうまくいくのだ、という固定化は、もう子どもへのおしつけになる。それにとらわれないで、子どもから出発しなくてはならなかった。また、評価されるいい授業をやろうとすると、子どもが思うように動いてくれないのにいらだってくるから、それも捨てた。教師ががんばりすぎると、子どもはしんどい。肩をはってがんばることもやめた。クラス全員一人残らず、あることをわかったりできたりしなくてはならない、という考えも、まちがいと悟った。わからないこと、できないことは不幸ではない。それが不幸だという考えがあることが不幸なのだ。（奥地 1983b, p.21）

教師が熱心に取り組んだとしても、それが子どもたちにどのように受け取られるかという視点がなくては「おしつけ」になってしまうことが指摘されている。

「がんばりすぎると、子どもはしんどい」という認識は、腹痛を訴えていた長男を「あるときははげまし、あるときは叱りとばして、なるべく通学させた」（奥地 1983b, p.11）奥地の経験と無縁ではないだろう。「わからないこと、できないことは不幸ではない」という認識も教師ではなく、母親の立場から得られたものと考えられる。母親としての経験は、教師としての教育観を変容させ、学校への批判的な視点を強めたのである。

記事の最後では、奥地の研究授業について述べられている。入念に準備された授業はうまくいったが、終了後に子どもたちは奥地に対して、「おもしろくなかった」「私もそう思った。先生、きょ

うの授業は、こまかいところまで流れを決めてきたんじゃない？ なんか、どっかのせられて動いているような気がして、それが原因じゃないかなあ」と奥地に話した。奥地は「そのとおりだ。何度も学年で授業をとおして練りあげた授業案で、当日の授業もなかなか手答えのあるものだったが、そこにも強制のにおいをかぎとるほど子どもは鋭いのである」（奥地 1983b, p.21）と述べている。

（3）戦後民間教育運動についての座談会

1984 年 8 月号には「座談会・明日の授業をつくる座標を求めて：戦後教育の流れを検討する」（伊東ほか 1984）が掲載されている。座談会で木幡寛 (10) は、自身を「遠山啓先生が亡くなる 3 年まえに数学教育協議会にはいって、いわゆる数教協の純粋培養みたいなかたちで育ってきた」と述べた上で、「数教協の成果を固定的にとらえていては、現代の子どもたちに通用しないのではないかと思っているのです。この 1 年間、授業を創ることで迷っているというのが、正直なところです」と吐露している（伊東ほか 1984, p.3）。この座談会で奥地は、戦後民間教育運動について、つぎのように述べている。

> 民間側が創りだした内容や方法は新鮮だったし、系統的でゆたかな方法は、はるかに文部省の教科書を超えるものがあったから、子どもはよく動くわけだし、うまくいった時代もあったのです。しかし、授業のかたちだけを学んだということを脱皮しなければ、やはり行き詰まりがくるのは、当然だったわけです。……民間教育運動からなにを学んだかということも、ピンからキリまでいろいろあって、生前に遠山啓先生が嘆かれていたのは、タイルで子どもの頭をたたく教師がいるということでした。そういうことは、かなり現場のなかでは起こったわけですよ。『わかるさんすう』を使っていれば、教科書どおり教えている教師よりはいい教師だみたいな思いあがりが育っていたように思います。
>
> 私は、とくに登校拒否や落ちこぼれの側からいうと、かなり授業研究などをしている教師が、むしろ自分はこれほど授業の工夫をしているのだから、それについてこれない子どもはおかしい、そこから脱落している子どもは問題児である、といった見方をつよめているように思うのです。（伊東ほか 1984, p.8）

水道方式（遠山啓が主唱した算数教育法）の教具であるタイルは、遠山教育学さらには戦後民間教育運動においてきわめて重要なものであり、そのタイルが体罰に用いられることは、民間教育運動の質が問われる事案である。優れた人材づくりのための学習指導要領に「オフィシャルな効率性」があるとするならば、戦後民間教育運動が持っていた「オルタナティブな効率性」と呼ぶべきものに対する違和感が表明されている。教師の望む方向に子どもを動かすことではなく、意のままにならない子どもの個別性が重視されているのである。

（4）最後の授業実践記録

1985 年 2 月号に掲載された「授業・かけがえのない、この“いのち„」は奥地の小学校教師としての最後の実践記録である。1984 年 8 月 17 ～ 20 日に、全国「ひと塾」（合宿形式の研究会）が沖縄県恩納村の安富祖小・中学校で開催され、奥地は 18、19 日に社会科の公開授業をする予定であった (11)。しかし、両日ともに台風警報が発令されて子どもが登校できなかったため公開授業は中止され、大人だけでの「授業づくりの講座」に切り替えられた (12)。奥地が「沖教組中頭支部・第 4 回公開授業研究会」として沖縄市立島袋小学校で授業をすることになっていた 8 月 20 日は午前 8 時に台風警報が解除され、公開授業が実施されることになった (13)。

この授業は奥地の授業実践の集大成とも言えるものであるが (14)、ここで注目したいのは公開授業の実施体制に関する奥地の記述である。重要な箇所であるため、長く引用する。

子どもたちが登校できるものかどうか、当日の朝までわからなかった。そして、数十分遅れて、ともかく子どもたちがそろったところで授業がはじまったのだった。席にはずいぶん空席がめだっていた。

子どもたちのまえに立ったとたん、私は、やっぱりこういうことをやってはいけなかったのではないか、と思った。子どもの眼が、「ぼくたち、なんで夏休みに、ほんとうは休みなのに学校へ来て、授業しなくてはいけないの」と言っているのを感じた[15]。しかも、広い体育館のまんなか、それも身体とあわないおとな用の会議机がまえむきにならべられているところに座り、ぐるりを知らないおとなたちにとりかこまれて、知らない先生と授業する。やっぱりこれは、子どもにとってはおしつけの場であり、教師のためにやらされた研究授業だった。……授業が終わって、仲よくなれたなと感じていた。……そこへ、がっくりすることがおきた。「奥地先生にお礼を言いましょう」と担任の声が子どもたちにかかったのだ。とんでもない、お礼をいうのはこっちだ。……私の制止はまにあわず、子どもたちは、「ありがとうございました」と、いっせいに声をそろえて、言わされていた。ちょうど官製の研究授業などで、授業者が、最後に、参観者の先生がたに向かって、子どもにお礼をいわせるように。（奥地 1985a, pp.35-37）

実践記録にこのように書いたことについて奥地は、「献身的に準備していただき、お礼のことばもない沖縄の先生がたに失礼だったのかもしれない。しかし、いま、まったく子どもの立場に立っていない学校がふえている。こちら“本土„のようにならぬよう、ホンネで語らねばと思うのだ。そして、これは教研に文句をつけているのではなく、そういう子どもとの関係をつくってしまった私自身への自戒のつもりなのである」（奥地 1985a, p.37）と述べている。「教研に文句をつけているのではなく」とあるが、痛烈な批判と読むことが妥当であろう。教研は「おしつけ」ではない子どものためのより良い教育をつくることが目的であると自明視されているが、実態は本当にそうなっているか――このことが問われているのである。

（5）学校との訣別

1985 年 3 月に小学校教師を辞めた奥地は、『ひと』に 2 件の記事を寄せている。一つは 1985 年 4 月号の「子どもが学校を棄てはじめた」、もう一つは同年 8 月号の「いま、なぜ公立学校の教師をやめたか」であり、奥地は後者でつぎのように述べている。

ひと夏の研究集会だけでも、汗をふきふき日本列島をあちこち移動して教育を語り、求め、実践を聞きあう人の数は、官・民あわせて何十万人にものぼるだろう。日常的にも、大学・教育研究所・PTA・市民の教育を考える会から小さなサークルにいたるまで、さまざまな場所で、どれほどの金と時間とエネルギーが教育を変えることにつかわれていることだろうか。それだけではない。『ひと』をはじめとして、教育を変えようと主張する雑誌、本、講演、あるいはテレビ・ラジオ番組などもたくさん存在しつづけている。

だが、教育は変わったか？……残念だが、本質的にはなにもかわらない。いや、むしろ、ますます管理は強化されていくにちがいない。行政の圧力だけではない。すでに、教師の感性自体が変質してしまっているのだから。反動文教政策反対という組合員自身が、……班競争・連帯責任制を管理の手段につかい、……その抑圧性に気づくどころか、子どもが悪いのは家庭のせい、母親のせいとしている状況を思いおこせば、浸食の根は深いと感じられる。……もし、登校拒否と私の内面が出会わなかったら、いまでも「熱心ないい先生」として、日々、校長とはけんかしながらも、楽しい学校づくりにいそしんでいたことだろう。（奥地 1985b, p.74）

奥地はこのように述べ、最後に東京シューレの

開設を報告している。登校拒否児の母親としての経験が、小学校教師としての奥地を変えたのである。

奥地は東京シューレの開設当初から確たる「フリースクール」の概念を持っていたわけではなく、前例のない学校外の子どもの場という実践は試行錯誤の連続であった[(16)]。

しかし、かつて奥地が『ひと』で「子どもから出発しなくてはならなかった」（奥地 1983b, p.21）と書いているように、意のままに子どもを動かす教師の指導性ではなく、意のままにならない子どもの個別性の尊重が、その実践の基底に位置づけられていた。そして、そのような観点は、奥地の「母親教師」としての経験から培われたと考えられる。

おわりに

本稿では教育雑誌『ひと』における奥地の記述に着目し、フリースクール開設以前の奥地の教育観を考察した。

「寿退職」が一般的であった時代に、奥地が 3 人の子の母親として小学校教師を続けることには多くの困難を伴った。1981 年頃には自身の父親の難病や、長男の登校拒否そして拒食症など、さらなる困難が重なった。退職も考えた奥地であったが、家庭における困難を通して「いのち」を強く認識し、小学校で「いのち」の授業に精力的に取り組んだ。奥地は「女の先生こそ、この能力主義と管理主義に侵された日本の学校教育をよみがえらせる力を内に秘めている」と考えたが、次第に学校への批判的視点を強めるようになり、戦後民間教育運動に対しても懐疑的な態度が示されるようになった。1985 年に奥地は小学校を退職し、東京シューレを開設するに至った。

東京シューレ開設の契機として長男の登校拒否は先行研究においても指摘されてきたが、本稿では登校拒否児の母親としての経験が、小学校教師としての奥地に与えた影響を重視して考察した。つまり、登校拒否児の母親としての経験によって、奥地は「いのち」の授業に取り組み、そして後には学校への批判的視点を強めるようになったのである。

フリースクール開設以前の奥地は『ひと』において、「教師」としての実践を多く発表するとともに、「母親」「女」「いのち」を強調していた。登校拒否児の母親であり、小学校教師であること、すなわち「母親教師」であることを通して、フリースクール開設以前の奥地の教育観は培われたのである。

【註】

(1) 不登校の名称は時代や論者により異なるが、本稿では 1980 年代を中心に検討するため、当時一般的呼称であった「登校拒否」を用いることにする。

(2) 刊行発起人をはじめとする『ひと』の主要な書き手の経歴については、萩野（2001）を参照。『ひと』創刊の経緯については香川（2014）を参照。

(3) 表 1 参照。初出では「奥山時子」の名で寄稿されている記事もあるが、それらの一部は奥地の単著（奥地 1982a）に所収されていることから、「奥山時子」は奥地の別名であることが分かる。この事実を明らかにすることについては、奥地の了承を得た。

(4) その他の内訳は「訪中感想記」（2 件）、「公開編集会議報」（1 件）、「とびらのことば」（3 件）、「私のすすめたい本」（1 件）である。

(5) 本稿で言及するすべての『ひと』掲載記事の書誌情報を掲載すると膨大な量になるため、文献一覧には原則として引用した記事のみ掲載する。また、読者参加型の雑誌であった『ひと』には一般読者（未成年を含む）による寄稿もあることから、個人名の公開を避けるために一部の記事については著者（座談会参加者）名を省略する。奥地の執筆記事および参加座談会については表 1 を参照。

(6) 戦後の男女教員数は文部科学省『学校基本調査』の本務教員数を参照。なお、2017 年は女性が約 26 万人（62％）、男性が約 16 万人（38％）となっている。

(7) 奥地の長男の登校拒否や拒食症の経緯については奥地（1983a, 1987, 1989 など）や田中（2015）を参照。引越や拒食症の時期は明記されていないが、奥地の著作や『ひと』での記述等を総合して判断した。なお長男の登校拒否や拒食症は奥地の著作

等によって周知の事実であることから、「長男」と明記することにした。

(8) 参加者の一人が奥地の子どもであることは、子ども本人が座談会のなかで発言している。

(9) 奥地は 1982 年 10 月 24 日に藤沢市労働会館で開催された「日曜ひと塾」(『ひと』読者会）で講演しており、参加者による報告が『ひと』1983 年 2 月号に掲載されている。この報告によれば､奥地は｢死というものがどういうことなのか、逐一見た。死から見ると、いのちがよく見える」と述べている。

(10) 木幡寛の略歴は以下の通りである。1949 年生まれ。埼玉県の公立小学校教員、明星学園の小中学校教員を経て、自由の森学園の設立に参加。1996 ～ 1998 年に自由の森学園高校の校長を務めるが、退職後に同校の機能不全を告白する手記を公表し、1999 年にフリースクール・ジャパンフレネを設立。

(11)『ひと』1984 年 5 月号掲載の全国「ひと塾」参加案内を参照。

(12)『ひと』1985 年 1 月号の「フォト・レポート①」を参照。

(13) 沖縄市立島袋小学校教員の寄稿「「生命の誕生・地球と人間」の授業を見て」(『ひと』1985 年 2 月号）を参照。

(14) 授業は三部から成り立っており、「パート I は、生命の歴史をふりかえるなかで、人類は、数えきれないほどの生命のつみ重ねの最後に出現した、まだ新顔の存在だということ、パート II では、人間は衣食住、呼吸などすべての面で、ほかの生命の支えがあってこそ生きていられるということ、パート III では、その人類が、いまや、“核„という地球の生命を全滅させることができる危険性をもったということ､を内容としている」(奥地 1985a, p.22)。

(15) 夏休みに研究授業への参加を求められた子どもの眼から、奥地が子どもの気持ちを読み取った背景には、登校を嫌がる長男の眼を見つめてきた経験があるとも考えられる。

(16) 初期の東京シューレや日本における「フリースクール」概念については、奥地（1991)、東京シューレ編（2000)、田中（2016）などを参照。

【文献】

朝倉景樹(1995)『登校拒否のエスノグラフィー』彩流社 .

樋田大二郎（1997)「「不登校を克服することで一段と成長する」――登校の正当性をめぐる言論のたたかい」今津孝次郎・樋田大二郎編『教育言説をどう読むか――教育を語ることばのしくみとはたらき』新曜社 , pp.185-206.

――――(2010)「「不登校は公教育の責務で解決する」」今津孝次郎・樋田大二郎編『続・教育言説をどう読むか――教育を語ることばから教育を問いなおす』新曜社 , pp.214-243.

板倉聖宣 (1973)「小学校での母親教師の比率――過去･現在、日本・世界」『ひと』11, pp.13-15.

伊東信夫・奥地圭子・木幡寛・芳賀直義・山住正己・編集部（1984)「座談会・明日の授業をつくる座標を求めて――戦後教育の流れを検討する」『ひと』140, pp.2-17.

香川七海（2014)「教育雑誌『ひと』創刊の理念と雑誌の構想――『ひと』編集委員会における議論を中心として」『教育學雑誌』(日本大学教育学会）49, pp.41-51.

荻野達史（2001)「文化変動の組織化（上）――『ひと』運動の研究」『人文論集』(静岡大学）51(2), pp.47-75.

奥地圭子（1969)「社会科教育――社会科における自主編成の前進」『教育』(教育科学研究会）19(3), pp.27-40.

――――（1974)「一年間でなにをしたか」『ひと』14, pp.83-95.

――――（1976)「母親教師って、いいわよ」『ひと』42, pp.12-23.

――――（1982a)『女先生のシンフォニー――「いのち」を生み、育てる』太郎次郎社 .

――――（1982b)「私のすすめたい本――菅龍一『善財童子ものがたり』」『ひと』114, pp.103-106.

――――(1982c)「「いのち」育てとしての教育」『ひと』118, pp.4-14.

――――（1983a)「学校とはなにか、子育てとはなにかを問われて」渡辺位編『登校拒否・学校に行かないで生きる』太郎次郎社 , pp.78-115.

――――（1983b)「この教育状況のもとで、授業をつくるとは」『ひと』125, pp.4-21.

――――（1985a）「授業・かけがえのない、この“いのち„――生命の誕生・地球と人間」『ひと』146, pp.21-37.

――――（1985b）「いま、なぜ公立学校の教師をやめたか」『ひと』152, pp.71-77.

――――（1987）「わが子の登校拒否が私を変えた」登校拒否を考える会編『学校に行かない子どもたち――登校拒否・新しい生き方の発見』教育史料出版会, pp.13-45.

――――（1989）『登校拒否は病気じゃない――私の体験的登校拒否論』教育史料出版会 .

――――（1991）『東京シューレ物語――学校の外で生きる子どもたち』教育史料出版会 .

佐川佳之（2009）「フリースクール運動のフレーム分析――1980 ～ 1990 年代に着目して」『〈教育と社会〉研究』（一橋大学〈教育と社会〉研究会）19, pp.46-54.

田中佑弥（2015）「「不登校」像の変容過程――精神科医、フリースクールに関わる人びとを中心に」『臨床教育学研究』（日本臨床教育学会）3, pp.127-145.

――――（2016）「日本における「フリースクール」概念に関する考察――意訳としての「フリースクール」とその濫用」『臨床教育学論集』（武庫川臨床教育学会）8, pp.23-39.

東京シューレ編（2000）『フリースクールとはなにか――子どもが創る・子どもと創る』教育史料出版会 .

Keiko Okuchi's Perspective on Education Previous to Establishing Her Free School: Focusing on the "Mother-Teacher" in *Hito*

Yuya Tanaka

Keiko Okuchi is known as the founder of Tokyo Shure, a leader among free schools in Japan. She has been highly active in relevant issues over many years, serving as representative trustee of the "Japan Free School Network" and "Japan Network to Consider School Refusal/Non-Attendance" as well as becoming a member of the Ministry of Education, Culture, Sports, Science, and Technology's "Committee for Consideration of Free Schools et cetera."

Previous research, while referring extensively to Okuchi as the operator of a free school, has directed little attention to her previous career as a committed elementary school teacher before opening Tokyo Shure in 1985. Mentions of Okuchi have been largely in regard to the issue of free schools, meaning that she is naturally seen as a free school operator; however, in order to address her work more deeply, her previous career should be considered as well. Based thereupon, this paper focuses on Okuchi's contributions to the educational journal *Hito* prior to opening her free school, and examines her perspectives on education from that period.

As an elementary school teacher and also the mother of three children, Okuchi struggled to balance work and household. Her burdens increased around 1981, when her father was diagnosed with an intractable disease and her oldest son refused to go to school and developed anorexia. While at one time she considered leaving her job, the difficulties at home led her to a stronger awareness of "life," which she poured into elementary school classes focused on "life." She felt that "it is women teachers in whom the power inheres to revive Japan's school education, which has been invaded by the ideologies of ability and management." However, her view on schools became more and more critical, and she came to hold a dubious attitude towards the postwar independent education movements as well. In 1985 she left her elementary school and established Tokyo Shure.

Existing research has pointed out that her oldest son's refusal to attend school was a key factor in the establishment of Tokyo Shure; this paper focuses on the effect of the experiences of Okuchi, the mother of a school-refusing child, on Okuchi, the elementary school teacher. That is, through her experiences as the mother of a school-refusing child, Okuchi came to focus on classes discussing "life," and finally to become more and more critical of school in general.

Previous to establishing her free school, Okuchi wrote extensively in *Hito* about her practice as a "teacher," while also emphasizing the keywords "mother," "woman," and "life." As the mother of a school-refusing child and an elementary school teacher ― that is, as a "mother-teacher" ― she developed her educational perspectives prior to establishing her free school.

Keywords: mother-teacher, school refusal, non-attendance, free school, independent education movement